



青い麦の子大会

10月11日(水), 特別支援学級の生徒4名が青い麦の子大会に参加してきました。この活動は都留支部の小中学生が集い、集会を通してふれあい、交流を深めるとしても大切な行事です。本校の生徒たちも他校生の前で自己紹介やゲーム担当を見事に表現・活躍し、交流を深めました。きっと、いつもの学校生活と違った貴重な体験をした1日になったと思います。

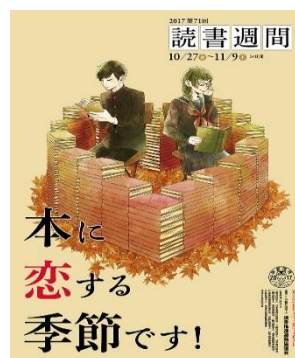


ビブリオバトル山梨2017

ビブリオバトルを知っていますか? 読書ゲームのことで知的書評合戦とも呼ばれます。面白いと思った本を一冊選び、その良さを3分で紹介します。紹介されたものについて全員で質疑を行った後に「読みたくなった本」の投票を行い「チャンプ本」を決めます。つまり、いかに本の紹介を効果的にできるかがポイントとなります。その大会が10月7日(土)に行われ、本校から小保瞳子さんが出場しましたが思うような成績を納めることはできませんでした。来年は朝読書で感銘を受けた本を紹介しに大勢の生徒が参加できればいいと思います。

各種入賞者

南都留支部読書感想文コンクール特選	山口敦也	園田彩花
増田誠大賞入選	上田朱夏	高部彩音
	横田三奈	白井優輝
親子読書作文優秀	渡邊咲桜	親子読書作文優良
緑化ポスター優良	森屋菜々子	渡邊結南
交通安全啓発標語コンクール最優秀	古屋岳人	



読書週間 ～ 私の好きな一冊特集

10月27日から11月09日までは読書週間。そこで、今回は「私の好きな一冊特集」です。秋の夜長に読んでみてはどうでしょう。

「しゃべれども しゃべれども」 佐藤多佳子著

言葉は時に誤解を生み、たった一言で人を傷つけたり、また逆に傷つけられたりすることがあります。しかしこの本を読むと、人を勇気づけ救えるのもまた言葉なのだ痛感します。まさに「言葉の大切さ」に出会える一冊です。

主人公の今昔亭三つ葉は、落語家です。古典落語を愛するあまり、私服も着物。頑固で気が短く、落語の腕は思うように上達しません。そんな三つ葉の元に集まったのは、気弱でうまく話せないテニスコーチ、嫌われるのを恐れ無愛想な美女、学校でいじめにあっている小学生、話下手で解説ができない元プロ野球選手。彼らに落語を通して、話し方を教えることになった三つ葉ですが、当の本人も落語はスランプ、恋にも悩むと迷走中。物語は、三つ葉も含めたこの五人が、徐々に前を向いて、一步を踏み出していくまでの姿が描かれます。

登場人物の一人一人が、とにかく個性に溢れ魅力的です。不器用だけど憎めない、愛おしい人々。ついつい応援してしまいたくなります。またテンポ良く、落語家らしく小気味深い語り口で、読み手を明るい気持ちにさせてくれます。ぜひ一度、手にとってみてください。(文責:早川麻里先生)

「幕が上がる」 広田オリザ著

弱小高校演劇部に所属する高校生が「学生演劇の女王」と呼ばれた新任の吉岡先生が顧問になったことにより本気で全国大会を目指す物語です。

普通の高校生が全国を目指して演劇を頑張ると言う内容ですが、これは中学生も大人もどこか共感できる青春物語と言った感じです。演劇に打ち込みながらも、それぞれの部員が、悩み、そして、友情を深めていく…。高校生活最後の年に受験も控えながらもどこか一生懸命になれない主人公の「わたし」が本気で全国を目指そうと奮闘する。中学生の皆さんは、より共感できるのでしょうか?

俳優の堺雅人さんも推薦している1冊です。そして、この小説は、映画、舞台にもなりました。私は、本も読みましたが、映画、舞台と全て観に行きました。それだけ、おもしろい1冊です。この本は、単行本、文庫本、映画のノベライズ版の3種類があります。3種類どれを読んでもよいと思います。まずは手にとって読んでみてください。(文責:伊東雄大先生)

「日本のこころの教育」 境野勝悟(さかいの かつのり)著

これを書いている今日は一般的には「終戦」記念日。私は英語が専門ですが、国際的な面から8月15日は「停戦」記念日と言う方がよいと思っています。その「停戦」中ゆえの占領政策では、二千年の日本の歴史・文化の多くが否定され、「悪もの」とされました。

一中でも盛んな「こんにちは、さようなら」の挨拶、「お父さん、お母さん」という言葉、皆さんは本当の意味を知っていますか? 占領政策で断絶された、たくさんの「日本のこころ」を見つめ返せば、「生き方」について考えることができ、君たちが本当のお父さんお母さんになったときにも、かわいい我が子に本物の教育をしてあげることができるでしょう。

本書は、元国語教師で哲学者・東洋思想研究家の著者が岩手県の私立花巻東高校で講演した内容がもとになっています。二時間という長時間の講演にもかかわらず、全校生徒が一言も私語なく聴き続けたという、心に響く、中学生にも十分読みやすい内容です。(文責:三枝幸一先生)

「くちびるに歌を」 中田永一著

中学合唱コンクールで、「手紙～拝啓 十五の君へ～」を歌うことになった合唱部。顧問から十五年後の自分に宛てて手紙を書く課題が出されました。一人ひとりの手紙には誰にも話せない悩みや秘密が綴られていて…。

それぞれが家族との関わりを通して生まれてきた意味や生きていく意味に悩み、向き合い、それらを抱えながらコンクールを目指していきます。個々が悩みを乗り越えていく度に、それが合唱にも表れてくる様子に心を動かされました。“音楽にはいくつもの色がある、そして、それが集まって一つの曲を奏でている”，そう思われた一冊です。クラスや学年も同じではないでしょうか。

この小説の中に、「どんなに苦しい時でも、辛い時でも、不幸な時でも、迷った時でも、悲しい時でも、くちびるに歌を忘れなければ、大丈夫。私たちは涙を拭いて、いつだって笑顔になれる。」という一文があります。合唱でなくてもいいですが、何か頑張れることがあること、みんなと一緒にかけるものがあるということは、とても素晴らしいなと改めて感じました。

共感できる部分がたくさんある小説です。興味がある人は是非手にとってみてください。

(文責:高村江里子先生)

「ツナグ」 辻村深月著

『ツナグ』は山梨県出身の直木賞作家・辻村深月さんの作品です。2012年に映画化され、話題になった頃に読もうと思っていましたが、結局、つい最近手に取った本でした。

「使者(ツナグ)」とは、大切な人を亡くした者と死者を一度だけ再会させる仲介人。5つの章でツナグの仲介のもと生者と死者が再会する話と、ツナグという職業を通じて、他人の人生に深くかかわっていく青年の葛藤と成長が描かれています。

もし死に別れた「誰か」ともう一度だけ会えたとしたら、どんなことを話し、なにをしたいか。『ツナグ』は生者に対して問いを投げかけているように思います。今、普通に生きているってことは当たり前なことでもなんでもない、奇跡の連続。後悔のない一日を生きているのでしょうか。

以前甲府の学校で一緒に勤めた先生と久しぶりに話しをしました。いつか会いたいねと電話を切った次の日、その方は都留の職場に現われました。驚いて言葉のでない私に、「だって明日の身もわからないから」と言ってお土産を手渡してくれました。70余歳になる先輩の、今日伝えたいことは今日伝える、今日できることは今日しよう、という行動力に感心したことを思い出しながら読んだ一冊でした。

(文責:小笠原博美先生)

「それでも僕の人生は“希望”でいっぱい」 ニック・ブイチチ著

オーストラリア人のニックさんは、生まれつき手足のない体(先天性四肢欠損症)です。

そのために、私たちにはあり得ないような経験をたくさんしてきました。残酷な現実にも何度もくじけそうになりましたが、さまざまな出会いや考え方を通して、どんな困難にも対処できる“しなやかな心”と“生きる技術”を身につけ、人生の意味を見だし、大学も卒業します。

ニックさんは現在35歳。世界各地で講演活動をし、多くの人に勇気と感動を与えています。そんなニックさんの体験や考え方、ピンチへの対処法、自分の変え方、人間関係づくりなどが、この本に述べられています。数年前には日本でもこの本が出版され、TV番組『アンビリバボー』にも取り上げられて、反響を得ました。

どんな立場の人が読んでもプラスになる、自分の未来を切り拓くために必要な情報が、あちらこちらに散りばめられた1冊です。

(文責:齊籐隆広先生)

「モンテ・クリスト伯」 アレクサンドル・デュマ著

この本の紹介文を読んだ時に非常に興味を持ち、すぐ図書館に行きました。何巻にも渡る長い物語でしたが、読み始めたらやめられなくなり、あっという間に読み切ってしまったことを今でも覚えています。この本は簡単に言うと復讐物語です。主人公のエドモン・ダンテスは若くて船長への昇格が決まっていたが、ある3人の陰謀によって婚約披露パーティーの最中に無実の罪で逮捕されてしまいました。獄門島に送られ、人相も変わってしまうような地獄の日々を送り、生涯出所できないようにされてしまったのです。しかし、そこで出会った神父から様々な学問を学び、財宝の在処を教えてもらい、ある方法で脱獄に成功後、「モンテ・クリスト伯」を名乗り、復讐をしていくという内容です。富と権力と知恵を駆使した復讐の仕方がとても痛快で、でも復讐の鬼とはなりきれない面もあり、。あまり言ってしまうと面白くなるので、続きは読んで下さい。最後に出てくる主人公の言葉「待て。そして希望を持って」が、心に残っています。どんな時でも希望を捨てずに頑張ろうと思わせてくれる一冊です。

(文責:小俣里香先生)

「羊と鋼の森」 宮下奈都著

「森の匂いがした。秋の、夜に近い時間の森。風が木々を揺らし、ざわざわと葉の鳴る音がする。夜になりかける時間の、森の匂い。」サスペンスかと思わせるような書き出し。243ページという手頃な厚さ。どんな話なのか分からないまま、読み出したら、知らなかった世界が広がっていました。

この本は、何か特に大きな事件が起こり、ハラハラどきどきするような話ではないのですが、ピアノの調律師という特殊な仕事を軸にその人達の日常が語られています。人には決められた人生が待っているわけではなく、日々の出会いがその人の人生を作り上げていく。幸せのとらえ方は人それぞれだけれど、幸せは日常に潜んでいる。日々の生活の中で出会う人だけでなく、自然や食べ物さえも人生を作っている。と、語っているようでした。ピアノの音さえ聞こえてくるような描写や自然界の様々な音の風景がすてきでした。

ピアノは、誰も一度は憧れる楽器。子どものためと買ったピアノは、今は調律をされぬまま、家具になっています。我が家のピアノがかわいそうでなんだかとてもすまないような気持ちになりました。

(文責:天野広子先生)

「夢をかなえるゾウ」 水野敬也著

「夢を叶えたい。自分も変わりたい。成功したい。」と思っている人におすすめの一冊。

自分を変えたくて自己啓発本やビジネス本を読むけれど読んで終わってしまうような三日坊主なサラリーマンが主人公。そんなサラリーマンが関西弁をしゃべるガネーシャと出会い人生が変わる。「幸せになりたいなら契約して、課題をクリアしろ」と主人公に迫ります。出された課題をクリアしていくと人間的に成長していて、成功に導かれるというお話。

基本的にガネーシャが毎日出題する課題を主人公ががんばってこなしていくストーリーですが、どの課題も今すぐできそうなものばかりで、「やってみよう！」と思えるものが多いです。先生も実際に毎日取り組みました！興味のある人は読んでみよう！

(文責:分部茜先生)